後撰和歌集　下

後撰和歌集巻第十二

戀哥四

女のもとにつかはしける

としゆきの朝臣

わか恋のかすをかそへはあまの原くもりふたかりふる雨のこと

これかれ女とあらそひけるにつかはしける

よみ人しらす

ちかひしみまくほしさにはかられてなきたる身のくるしきにける

女につかはしける

枇杷左大臣

山彦の声にたてゝもよふへくは逢見ぬ人そこひしかりける

身よりあまれる人をおもひかけつゝ

くらしかね

きのとものり

玉藻かるあまのゆきかたさすさをのなかくや人をうらみわたらむ

あしひきの山下しけき夏草の又かくれぬる

かくしつゝ

思ふことくちぬへき海の底にしつめるかうきつかた

わか身にみえぬ行末のあはれとそ思ふ

よみ人しらす

おきつ浪の浦の白浪たちかへりよるへなきにもなりにけるかな

わひしらて行人のわかれのなくさまから
ましまして
実なりてわかるゝ杜のわすれ清水にかけしらけなき
なし
近くなれ京にのほりしあふ坂の関の外まてしたひ給ひ
流るく成まかりのおなこの行末はいまさて
とらくあさくなきしなしつゝ涙しく
単かかれりむしろあ
いまはとてこゝにまつ蜩のなくをなく思ひける涙を
なし
源巨城（宗イ）

ほとゝきすと云蜩のなく夜のまはつれなくそある
これはひとりの女のつめんとてよみける
よみ人しらす
親あるみてかはらうとみのさつかひすまひ給え
おとこの相たひつかひしける女のかたの
の家にゆきかよひしたうさきれなきこと等
とやかりもへしもわか成にあれく
田舎にてなくなる家のあまて
足引の山田のそほつ我をてほしと思ふとはしめるかな
こそつらしもての女のなませよかしとひて

いつはりと[illegible]へよそ[illegible]れてつらし
[illegible]
[illegible]はわれとおもはず住吉の松そ年をつもら[illegible]
女まつらし[illegible]

鎌倉右大臣
ひさしくにいふひとそある[illegible]の[illegible]

題しらず　いせ
我[illegible]恋しと[illegible]
題しらず　よみ人しらず
紀[illegible]のことそ深て[illegible]

清[illegible]人[illegible]
紀[illegible]
題しらず
紀[illegible]
[illegible]人[illegible]年
月[illegible]
[illegible]よみ人しらず
いにしへの野中のしみづ見るからにさしぐむものは涙なりけり
[illegible]の[illegible]
[illegible]

あま雲のよそにのみしてふる事はわかゐる山の風はやみなり

かくきこえけれはをとこのかへりこともせさりけれは

何事かはかりて岩ほにすむ人のあひかたからぬ

あひみるひとの人のかしこしとそいふ

帰りつかはしける

とはかりて松風とかまかりにける人にかはりて

返し

ここぬか河の淀のかとにひとすみ見えし人のこゝろなるらん

女のもとにつかはしける

住吉の岸によりゐて沖つ浪まつらくものをまち侘ぬ

返し

いせ

住の江のめに近からハ岸にゐて浪の数をもよむへきものを

つかうまつる人のもとにつかはしける

出ひて色んと思ふ心はさきはてもあまてもあれねとこそね

返し

堀河太政大臣

もみちはゝおしきにしきと見しかとも時雨とゝもにふりてそきし

返し

よみ人しらす

あふ事は難波の浦のみをつくし身をつくしてもあはんとそ思

なをそのゝ秋の関山の山風にあひみたるゝ

秋きりの立つゝめくりいつれとも人のしらなん

このよひはかんなりのくさしいひおこせ
たれは　　　　伊勢
秋とてや今はかきりのたちぬらん思ひにあへぬものならなくに
ならなくにとふ事もかはりける
君か為のおもひ出ゝひとにいひをとす涙なりけり
なかりしは　ある人　返し
白露のおきそめひさ事よりはころもかへしつゝねなんとそ思へ
人のもとにつかはしける
忘れなんといひしことにも思ひねはあふさきも都人
女のもとにつかはしける

朝忠朝臣
白浪のうち出る浜の浜千鳥跡やたつぬるしるへなるらん
女につかはしける
大江朝綱朝臣
おもはすにあそふこゝろのあひ見そめて人にあひそめてまさる
伊勢わたる人よりましてくやしきはとふのくはへるなりけり
贈太政大臣
ひさかたのあまの原にもあらなくに人のためにはたえしとそ思ふ
伊勢
返し

その人の心をまことにはかりて侍りけるを(?)

浄蔵くらまの山へなんいるといへりけれは

平中興かむすめ

墨染のくらまの山に入人はたとるたとるもかへりこなゝむ(?)

あひおもふ(?)[illegible]

[illegible]

修縁(?)

月さへ(?)[illegible]

まさしくあはれも時ならひ行へき女(?)

とへ(?)しらて(?)

読人しらす

高砂の松を緑と見し事は下の紅葉をしらぬなりけり

返し

時わかぬ松の緑も限なき思ひには猶色やもえける

こゝろさしをろかならすいひつかはしける(?)

人につかはしける

水鳥のはかなき跡に年をへてかよふはかりのえにこそ有けれ

返し

浪の上に跡やは見ゆる水鳥のうきてへぬらん年はかそふや(?)

せうそこつかはしける女のもとより返事

のまへにてなん返事はいひつかはしけれは(?)

こゝひとつあかなくもおもひつゝさも
しれよ行きてかへるとも見えしもかはらしを
いつれ遠きをかくりとてかほかゝるとなりけり
つゝしかな

あきかせに白浪わかされはとまりにいたるもみかな
返し　　　　　三條右大臣
宇治川の波さへ見えしいかなるのかはらもなかりけれ
いつしのひくもあはなん人の心かさ
涙にみえてかれて

よみ人しらす

花薄ほに出ることもあきかせにむすはれぬる旅の風
なそもしとおもふみていてくる人まつりしらぬかな
　　　　あるしさへむしのこゑ
まろうとは秋のみこそ人のなにはかなくも成ぬるや
返し　　　　　源是茂朝臣
君と思ふなとかはなき秋の夜にいかなることの人に逢
わか身に何ことにてふ人と思ひまたくとても
もと行きぬる夜わけてもかくてや人見え
あまのかはにをかされはたなはたの月こそもろく見えけり
法上つけ

鏡山あけてこそ見め秋の夜の霧やたちかへり見まほしきかな
何ひきたつ行女の人あまたあらは
もろともにつらしもの

平まれよの朝臣　希世

杉すれく人におもひことなき道の事(?)まのこせにける
人のすみに渡りく行もまたひとはなく
すのことつゝありてつらしもの

藤原成国

旅の田ふありあまあそぬらむ道の道(?)をすこし
年またこそやうしのれさまなかり

名れてつらしもの

中務

秋風の吹につけてもとはぬかな荻の葉ならは音はしてまし
とし月をまつこそきこし行まつ人
まつさらしもの

読人不知

衣手のかはくまもなく年月のつもりもあまる涙
女まつらしけるよ
中くにとひけてかう家月にたまもあをそらむ
よし

うつしあへてこそみる女にかゝるあへかたく
人に流されける女
かきつくるひまもなき世の中に梅のさかりを
われわすれぬるはたゆ給ふもおもひけり
つかうまつりける

承香殿中納言

この人はむかしのつかひの白雲のことよりそれにつけて
ことしれ給はもうなつかしける女
この人し次
菊の花移ろふをおくれてしもかれぬ

返し

とかくてうつりにし迄菊の花かへる色をは誰かみるへき
人の心まよひてしよりもひくらしつゝ行ふ
むかしさきのみくにのあへのまかりかれは五月
あつかひのはつかしもとり
諫かくれけり俺のたひらいつゝ雲にかひあへて
まさかに給ふ女のみまさなくて
とひかされてまいらつしける
あかつきはてあひの池にてそれ男ともけるに人かは
女はつかうまつりける

かへしにその御のあはつまにかへさぬよのつとめて男のもとへ

返し

明の月もくもりあかれはうれしとおもふにかひなくもあけはてぬれ
せきもりもつらしとおもふにかくらく
ゆめにしもせしゆめまちにえあひみゆるゝ

源よしの朝臣 善

あふさかはあつま路とこそきゝしかと心つくしの関にそ有ける

春澄善縄朝臣女

返し

あふさかもはてはゆきゝの関もゐす尋ねてとひこきなはかへさし

女のもとにつかはしける

としの朝臣

足引の山下水のなかれてハ瀧つせことにとゝろつゝ

返し　読人しらず

木の葉ちる瀧津山の岩間にはみえそみえぬなりけり

人のもとにまかりてつかはしける

貫之

暁のなからましかは白露のおきてわひしき別せましや

返し　よみ人しらず

おきてゆく人の心を白露の我こそまつハおもひきえぬれ

女のもとよりあかつきにかへりてつかはしける

これ高砂のといふ事をひとつにし
てたてまつれて

高砂の松といひつゝ年をへてかはらぬときはの騰
人のもとにまかりけるよ世をひとつかひ侍り
まうとあやうつ(ち)てはてにいまそかひ侍れ
よりてつかはしける

貫之

風をいたみくゆる煙のたちいても猶こりすまの浦そ恋しき
ありしかく女のもとにつかはしける

よみ人しらす

いはのうへのもの限りなきさんをは雲井に身をなし人にもあらむ
もろしけ

衣のをとこの山の時雨にまされはあはれ(?)そ
世をうしといふ女のもとにつかはしける
かへし侍りけれは

よみ人しらす思ふ(?)よるの袖(?)のみぬれて身をしるの(?)涙に
女につかはしける

かくはかりおもひのいそれは涙の川となりてなかれ
人のうきせにはなかれしつゝ

よしもち

紀の貫之の子におほせたまひて世の歌
大江千里をはしめとひろく女をえらひ進る
うつ成く薄も雨にまうりこそあれ
いそく久しうまかりもなりて
たり以女思ひ佛に祈つゝ此菩薩に
うらくこそうりしみんしられたらくとひ
よつるしるし
くれの菩薩思ひまえれて観世音の身を現し
かくつたへうかゝはきて千里男人とく
あしく世にもかくしひろんえり給ふ

あらしのうちのなくさめとなし
わりつきしかりいひとりて紀為れ
めこよろこひつゝしけれ
是ひとへに菩薩の御ちかひもやとの道中にまゐりわたしける
ましくのことに紀貫之が時かのくにのまけ
藤原清輔のもしあそむひとへとちかう
て内侍や弟ことによりしくれのしるさ
京よのおりをとの紀にこれもしるあ
素延法師よむしるして続く歌かりけり
それし國にかくりしやうのその流の

しける
忠房朝臣
いつれ秋まちかへりしとを野へのわさちかへるらむ
せうそこつかはしける女のもとよりまかりて
やよしもわかれしをひとつかはされ
ひさまさりてこれかせきゆゑにかへりぬとて
ある人のむすめあまたありけるを
いひわつらひ侍りてこひ侍りけれ
たれをかわかつの女よつらしかりつる
よみ人しらす
關山の岑の杉むらすきゆけとあふみはなをそはるけかりける
わきもこの歌よみしけるときにせく
てとをしく侍りけれは
おひまさる山ひとつにこゝろならぬ
いとひしのひくゆるかわかなく
波路わかる思へはそてのかわかぬ
成し
うつせみのわかれはおなしかなしさに
うつまさとかいふ所に大輔か侍りけるにつかはし
しける
小野道風朝臣
限りなく思ひ入日のともにのみ西の山へとなかめやるかな

女五のみこによ　忠房親王

君か名のたつまとゝなからなるといかはかりも今はなくてや

返し　女五のみこ

年ふりとみましはかなひの白雲にいとゝかけてはおもはさるらむ

みえしまのよらしあくつゝらむまゝ

ありけれ朝臣

まちくよまことにあやしと思ひともよふ人のなをたのむか

道風忍てまうてくにこもりにきくやさゝらと

たえせしまれなつゝなるる

大輔

いとくてしらさりつる稲妻の光はまちあるをときかる

大輔かりにまかりてこなたへかくまかりて

ふりされたくにくい文をかはしけるにつ

かしける　朝忠朝臣

いつまたちくる白浪の名にしおはゝ船のひろ時まちし

返し　大輔

たまくら袖にかゝる白波のよるへなかりもとへみなんそ

よしみちの親臣さしかくれなしにけしとちえと

ふりて文わたしはつかはしける

蔵内

ちるひても我にかはらぬ夜の鶴ありしを命かきりなは
ものひとく波かりわすれてもなくさりわすれん

道風

をあちあはこゝろて道よ草の葉よのかゝて明侘さ
ぬいらんとそしまかりわすれてされからくし
我かうの侘りわすれてもやくりわよらひ
いつしても侘やとらまえん
思ふてさまも浅けは滝川の道かくつかあさ名道

かへし　　大輔

滝川のいはまの瀬ゝとくりきえ見へすつゝみちもわか道を

大輔かりつかはしける

敦忠朝臣

池水のいひ出る事のかたけれはみこもりなからとしそへにける

後撰和謌集巻第十三

戀哥五

題不知　　　　　　枇杷大臣哥之

在原業平朝臣　諸本如此

いせの海にあそふあまとも成にしか浪かきわけてみるめかつかん

返し　　　　　　　　いせ

朧けのあまやはかつくいせの海の浪たかき浦におふるみるめは

つれなく見え侍りける人に

よみ人しらす

流しとやいひそて逢白露の人よりさきにおきてしもを

なかりしかす

まくらは人のかたらんことさへ露の命そすてかねつる

小野小町かあね

獨ある時まつるゝ鳥の音もまれにあふ夜は侘しかりける

女のうらみおこせて侍りける返事に

あつたゝ

蜻蛉のむかしかはりになりにしもえんともいはす我身なるかな

わかことたゆることなきおもひをもあひ見てくやし

はかなくも見えてうしなくなるくらし

あはれしられてつらしける

讀人しらす

山道のかよひ人のたえぬるわさの風と結ぶらん

題しらず

うたゝねの夢うつゝなるわすれ事を秋の夜すからおもひかね

女のはまうらにしほやくうたて

あけぐれまてしもかゝるあはれをしるは

つらしとやはる

道信朝臣

秋の夜の風の音さへしのひねの絶まなきにもおもひ絶ぬる

題しらず

読人しらず

ひとりにてうきよの秋の夜の風の音をさしもきこゆるや

ひとりのみまよひあかしつる月の夜の

うれしさにわひあかしぬるよは

さらすの月にて

人もしれぬ涙のわか袖は秋の夜すからあかしつる

ものおもふ人よつらしとも

後太政大臣

ものおもひもひとしれぬ秋風の吹く音もきく心地こそ

せかれてもくるしきまてあはれ

まろ男をこれよりあはれとひとらく

とはれつゝはかなくうつりゆく世のうきつらしされて

しる人ぞしる

蓮葉の上はつれなきうらにこそものあらかひはつくといふなれ

おとこのつらく成ける女のかれ

つかはしける

わかめはなみてあくことのなきものをたえてたえ

女のかへしはかくしえあそくく

はへりしかり

おそのゝつまこなたとさえへ人もなきものを

女よ袖にかくしまちかひぬらかふ

返りととらせていとおもしろかつる

三十段

なかひらのおほいまうちきみのなくなり給ひてのち

女のもとにかくいひやりける

しきか

秋ふかき人をこそこひしけれ松虫のこゑとおもひかけゝるを

つきつらしけれ女のおもひはへらり

されたとよまりかつつまつりける

いまはこのよにあるまじくなりぬれはいとかなしきに

一條のきみといひけるまゆのひとつ

やすらかれてあすのこともおもしろく

一條

世中くハうけとさすみてすゑあさかわ井殿て思ふよしや

なし　いせ

かけられはしんそまうらて近くしめはれしねせなら

人のむまめよ思ひくかりもひ行もつり

つもれよこえて行きましてせうれそらるこ

もの哉のりよ　しりへひくしらず

人よのうさともちて次わりに着かしれ我身ともなる

見えすましつ女よ又袖はらえよとおもまつ

こうかれと契りしかつしくれかれて休つ

ちしもつ

郭公さきはなのひとつ離くなくとともこめもさす涙

人のりくよそしめても渡らくつゝあそ

つゝしもつ

常よりもあさうさの暁は露さへかつ袖ありそれもつ

思ひくまてこまつ人の露れもしくかり

もの哉まめしつゝをくつらしもつ

よく霞の暁あさとも思はさつのよれ山道や

なし

霞をもあまかり侍え旅あるもいのち宿のつきれせさりし

なかなかにおもひしりてそ久しうとえこそかけらの
かくよみてつかはしける

源英明朝臣

いせの海のあまのまてかたのまへにかけてかけるおもひけるをとこの [illegible]
えてこそ行きつる女乃家のまへよりまかり
まかりきくいそくうちひとりしておもひ
すみ給ひてけん

わすれぬるほとのへてそ我身をはおもひしりつる
題しらす

藤原高世

よみ人しらす

春のわかれ雲井にこえてゆくやまの道もなかりけり
男のもとにまかりてつかはしける

俊子

ともすれはかせにしたかふしらくものちるをみるにそ [illegible]
題しらす

藤原敏行朝臣女

思ひやることのはかりにそへてみるくさの人のいのちそ [illegible]

よみ人しらす

とはれぬと我もおもへはまちわひて今はかきりと
男のやまひしてひさしくありけるにつかはしける
しうわするなとつかはしける

今迄も消えてありつる露の身ハおくへき宿のあれハ成けり

返し

言葉も霜にあれ成にし家なれハ露も宿をもいかゝ定めむ

うしとやく侍りける人の返事に

忘れなと思ひし物を今は涙におほれぬるかな

よみ人しらず

現身は海をし渡る浪なれは浜の真砂を思ひこそやれ

女につかはしける

さら浪まぬく言ふかひもなき浦にまた寄る方もなき身なれは

藤原の某朝臣にみよしのゝ侍りけり

時々しわりなく忍ふる事侍りつゝかり

ぬる女にさるまじき所にまかりけるに

いかさまにすゑ物かた聞え侍りける

敦忠朝臣

いせ海の千尋の浜に拾ふとも今は何てふかひかあるへき

あさちの朝臣とうはせぬと侍りける

侍りける女のもとよりうとく侍りけれはひ

返しとてかりて久しくありてまたなれ

ありし女よりひさしくせうそこもせさりける

よられ侍く

本院のくら

忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ
こひしき　読人しらず

春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色かはりゆく
いせ

めかれせぬ風にはあらでつゆしもの[illegible]
[illegible]
つらゆき

君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪もこえなむ
古今

松山[illegible]浪こさば[illegible]
女の[illegible]
[illegible]

贈太政大臣

かくばかり[illegible]秋風[illegible]
[illegible]
[illegible]
わすられ[illegible]
読人しらず

人[illegible]

昔ひとつ女のりとよせうれをつつらし
ゑりかれん
昔摂の山下まてもりなかれくゝとう様母
男の云ひふかれん

いせ

俄ら時雨出てさはらて世ふくなるらん
あやの海をりきつ女を君とふともい
ひたすしてしやまて
いそせともひはなる花の男なへちとあかる
あらこのいかたえまゝてこねこしひ

て行けし　読人しらす

これやこのあまのはころも松のなと思ひのゝす
とまれとあるこのいかしきらり
かれん
あきやくる露やまかふとおもふまてしよこにをあるか
地ひとつ人の人しきまとうさらむらわ
時わかてまゝくとうりかゝなけし
かひくらしとてこりかれん
年ころもひかゝ我男と行の人よわりし志賀
いく世くまでこそりかゝあひくとせい

まつ人はかり寝のとこのさひしさにへくうちまつ
うくつらしけり
わかる時に悲しき人はまたかの浦にすまふ我身ハ
為頼朝臣ほとゝきすかへる女のもとよりのとまりの
ことはれて
寛蓮法師母
詠ゝ人まつひのよそと見えくるかな
思ひしる人
よみ人しらす
今はとて難波のことに雑波すまぬしらぬの[illegible]
思ふことひとつまつ人はまつてなと

たのめこし君かつけのつゆのよかれ
とめか浦かりまくくさそひしもし
うきは侍られて
少輔内侍
今はさて風にまかせて清さよそのいそのさかえ
藤原範長
返し
波あまたれの命をかけて須磨の浦のつらさをおもふらし
女のもとにつかはしける
よみ人しらす
世をすてゝ山に入る人須磨の浦にすてゝ世を恋しける

返し

渕となる人の心の淀河はわかれしなかそそこにて見えけれ
つひには絶えてこそ見るへかりけれと人をも
思はおほきにて人をうらみそいひて
といひかへして行けれは

こそ々のもとにいてゝまかりけるを思ひのとけにけるは
左大臣河原にいひて行けれは

内侍にひきいて

思ひける君に思ひの淀川なかれわかれてあさくなるとも

大輔よみける

左大臣

今はやま山を出て御けるかもて我よそ

返し

今はさは山のこれの郎なてすゝめよとはかき山

左大臣によみける

中務

思ひにたえかねにけむ思ひそのかなしさをつらさのみ

右近よみけりける

左大臣

思ひ侘君のつらさは言ふも人のためしにもなる

たのめこし此夜はかりは[illegible]

読人しらす

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の朝臣

[illegible]波の[illegible]

返し　　中将内侍

[illegible]

題しらす　　小野道風

大かたは[illegible]天河[illegible]

返し　　よみ人しらす

[illegible]

[illegible]

これまさの朝臣

[illegible]

ことい(て)きてのちに京極御息所に

つかはしける

もとよしのみこ

侘ぬれは今はた同し難波なるみをつくしてもあはんとそ思

きのふ見し花のかほとてけさ見れは
ねてこそさらに色まさりけれ左大臣の返し
侍りけれと
敦忠朝臣
いかにしてかく思ふてふ事をたに人つてならて君にかたらむ
公頼朝臣のむすめにすみはしめ侍りけるに
まかりてのち雨ふりてあしたにつかはしける
いつまてかくもゐるへき
朝忠朝臣
たのめしにたかはぬ人のこころにもいたくたのむは
まつといふ人のつれなくなりにけれは
あはれてふつゆひとつ人のことのはに
たのみしことそ
清蔭朝臣
かくなから思ひしものをいかにして
人のこころは海のみそれのなれ
君をしのひて
わすれなむと思ひしもの
ゆめにしてひとり
よみ人しらす
いはや文人よみ侍けるに

人のくにゝはへりけるをわかれてのちにめし
侍りけれはみちよりいひつかはしける
ちかゝらは浦も都もわかれしをなにか海へとゝふらひ
人をおもひかけていひわたり侍けるを
まちとをにのみ侍りけれは
かくそねぬ月は山のはよわくねとまつ月をまちつゝ
久しくいひわたり侍るまてつれなく
のみ侍りけれは
凡河内躬恒
たのめつゝあはて年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなむ

返し
いせ
夏虫のしるしるまとふおもひをはこりぬかなしとたれか見さらむ
ぬしをある人につかはしける
読人しらす
打侘てよはゝむ声に山ひこのこたへぬ山はあらしとそ思ふ
返し
山彦の声のまにまにとひゆかはむなしき空にゆきやかへらむ
久しくいひわたり侍るをまちかねて成
侍りけれは
わか恋はゆめのみとせは空蝉のもぬけるをやかてくらさむ

たいしす

男これにてねたかりて袖はかへし思ひはかくしてやりて

返し

袖ぬれて別れし袖は君の思ひの涙やまさる

女のもとにはかりつゝまつらむと

ふきまとひみちよりつかはしける女

流れても逢ふ瀬ありやと涙川きえせぬ宿の淵

男ありけるまたこゝろなきこそ

かくしもあはむの門くらまでこそ

女のいとくやしかりけるはかなきありさま

といひやりけるは

かへしもみえたれはかれなむとひとりたはれ

人にも見えしとやりけるの時

我が身からうきよにすみの衣ならむ我よりまさる人の

ありとこそきけまたおもひまさりて

又道にかへて後つれなき頭ましまして行

返し

頭よそにあらんなれど涙もまたえむとかひなき

朝綱卿の女にかよひしつらしをかき

ことなき女にひつつましくひとしくなりゆく

秋の夜のひとくゆかしかれは

[illegible]

[illegible]

[illegible]男の[illegible]

[illegible]

[illegible]

返し

[illegible]

又女の[illegible]しける歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]男[illegible]

物[illegible]

[illegible]

返し

[illegible]

[illegible]女[illegible]

月[illegible]

[illegible]

業平朝臣

白雲にはねうちかはしとぶ君をこひかねき

女のもとにつかはしける

よみ人しらす

よそにのみこひやわたらむしら雲のたえまなくのみかゝるらし

たいしらす

我恋はゆくへもしらすなくさへはあはぬなけきそかきりなかりける

忠岑

こひしさのまさりのほかにこかれゆく身もこかれゆく思ひなりけり

又おなし

ふく風の[illegible]のたえまもなきのみや[illegible]

又忠岑

川との海をとまりなく[illegible]をこひしきよそに[illegible]

又たゝとこ

天の河[illegible]のそてをぬらしつ[illegible]

後撰和歌集巻第十四

恋哥六

人のもとにつかはしける

よみ人しらず

わか事をとにかくにかくてそ思ひはつる岩とこそなれ

返し

君か為わかつこゝろの緑なれは根をもあらはとまつかひ

こゝろまくらにこそ我はもとめし物をひかへ

まことにわけつゝかれせ清ら

こりにけり

うれしきはおもひかけてもなかりつるかへり

女のもとにつかはしける

うしとおもふ君かよにこそ

返し

根をとめて雲井にたかくなりぬる人をまたをる

いひはてゝひさしくなりにける人につかはしける

女又はかへしける

恋しさはあまつ玉のをせきとめむ思はゝ

返し

あまつかりにしも

おとこのまへこそなき事なるへし
されと人やいつわりてしんしく
くるしからす又物思ふてそのさためしとおもひ給
ぬへし
世の人夫婦の日比はなれしたしくなりてかひなら
おとこの久しくなりてまつさらされは
いもうとの心みなかくや成ましき夫の為にこそ身の程て年ぶり
のこし
いもうと今もむかしまれにきたちもとへてよるのな
おとこのこゝろしたりける時はゝまよしく
こきやうの地にひとく後にかれしうちそれと
まちくこそ有まれ
經るし着きよ佐くさ様と申は後つとまあのこく
いひ侍く又れせりとも思ひまする
まさる男は大月かりまきてこそ
あるひさしうわりつれしいひく
歯ありけまるま
恋れく世の里の時なりけるてさなきて給し
歌
まし 寸
まさやまの草なきをあはれ迷ひし事をなあんやら

物いひ侘て女のもとよりいひやりける

家の命にすみ侍けるをのちにはさかりてとひ侍らさ

女の涙のまねきをえてかへしとて

よみ人しらす

小山田の水ならなくにかくはかりなかれそめてはたえん物かは

右大臣

世にくものよそにもわれはなりゆくか

あはれなる心をしらすつらくしも

まれなく　これひらの朝臣女

明日の浦にあはれなる身もなきことを

うしめく人につかはしける

よみ人しらす

とひつまにいひはへるをひとつにいひそめて

いひひとつやらふものを文すくひ出

てまつひ侍ましていときこゆかなん

あはれといひてかはなつのこゝろといひつ

くしく行まれん
わかせこかくめらゝよけりれはなくたえてこといひつゝまた
といひけり女のりてゝ
わさこりれ新侍
あかつきをとこゝろにあはれと今ハのありひとゝまりてやかれ
返し　しらん人しす
ありなからひとえ夜の事にたちわかれてのちの
いひらしまりのありとこのあまいとひそう
せりまむとれこしく女のひとつらしまう
ひさてとあらられの流恋涙のうちとひまうし

あすしとこゝろにかゝりける人のもとへ
行りそれ也いとくまひかへといひやり
あかりのわかまへわかゝりしかくしく
れとしこをけり
さうれおもう人まふえ宮をあひのやうにて恋ハ
こゝろさしをハ多くてあれとも人かへりなん
はかしこいひとつくゆきまかせん
わかゝうなてのかゝりのほとに人かをかうかに侍りさ
たらしんけ
京なる男あふひかたにとりわたりまかりさしとそれんハいまもしらもれかな

いかなりけるをりにかありけん郭公(?)にけきてつよきをいはむ
とひつ御よりも年ふるへそかれけるあはれなる
あり人にてつかはしける女のもとにつかはしける
つかはしける

源よしのふ

家にゆく人にことつてむからさきの岸にさくなる花さくらつみ
とものかれはなりゆかれれともかれ
とゝまる[illegible]をつかはしとて

返し
　　　　　　　　　　　　　　　　　人しらす

あまりけるあかけれはみなかえりまちなくらへとてこそ

菅原の朝臣のまかりけるに家に侍りける
女にかよひける男中たえてまた
とひて侍りけれは

すかはらやふしみの里のあれしより
かよひし人のあともたえにき

女の男をいとひてさすかにいかゝおほえけん
いひおくりける

ちはやふる神のいかきも成ぬへし

返し

ちはやふる神も雲井にすむ[illegible]にはるかなる雲井に人をまつ

女二乃男ありける女の男ありてと

うゑつみし淵をまさらくありあけの花とゝもに栄まかせて

又さらにうつろひぬへき人の心かな

藤原守文

松山になく鶯のこゑをこそ人はおもひそ

あさきりのはるゝにあらむ春かきをやらく

ひきれしとおもひけり〳〵まよひて

よみ人しらず

さらくことしひとのまたき山かひさくあやめのゆくへ

返し

ありあけのこゑをきゝつゝ山さとにいつはてゝかへるさ

女のもとにいひつかはしけるによみてと

こひめとこせて待ちかねつれは

まさしかりし風すなはち今をあはぬ家

わりなしの男とはなれたにすまふ行末

待ちきえしのかたてゝ成まされは

兼衛

人しれすまつにねられぬ有明の月にさへこそあさむかれけれ

いでゝゆく男待らん人のかくしからつ

あなうしき人よりほかにしらるれは

元方

立田川といふは岩のなを杜といへる杜のいはれなるとぞ

宇多院に侍ける人にせうそこつかはし
けるを返事も侍らざりければ
よみ人しらず

うたの野はみゝなし山かよぶこ鳥よぶこゑにだにこたへざるらむ

耳なし山はよぶこ鳥のこゑに何ごとも答へぬ時はこれを
ほゞいはれし侍る人に

たいしらず○

こひ侘てしぬる事こそまことにはあさましき盛なれ

つらかりける女にけしき入れはべりける
こゝろざし　よみ人しらず

わすれなむと入れし君をうらみしの流れとぞ見ん
わびぬとおもふ女はまことわれながらさはれは
しらぬ時には追わする今日を我まゝに
女のもとに遣はしそめくれける
藤原かけの
あはれとも桃の花にも思ひなくとも見えそめける
をとこのもとに遣はしたりければ
よみ人しらず

あさき成ものは鏡山にもえてまつのたえてそ知

返し

こえぬまて待てる鏡山にもまちつゝ見んとをき

女にもの（物）いひ侍りけるをこれかれもいひける人

に物いひけるを聞て

我為につらきは山のもとに見えてけることに遠き

返し

わか身こそ世に鏡ざらしむ人のつらさ

人につかはしける

かいせん法師

わさとにはあらぬ人の我にいふ心ありけれは

こよひ物いひける人のもとにはしつかはし

うちわすれてもまつといふうへにありもして

讀人しらず

まちかねてつらきところへかはせとは物いふはいかに

女のもとにつかはしける

藤原さねき

はしるひもあはれにかゝる涙川

返し

よみ人しらず

涙にてわかるゝみかはそのうちの世に成にしもの

男のけしき花ならはにほひく
こゝりきれて

花盛すきし人はつらけれと言のはになほやまた
おもかけの久しかりけれハ

右近

此事ともまた月日ハ過去りにけれと今ハ忘れ
わひしわひく侍るハ人のりよえしう
まうこりきれて忘草なほそらにも
あひしらぬやうにといひはなち
きれて

読人しらす

忘草植もゆかしきをみてこそおもひやらしと
返し
うれしきは忘草をハ植へてこそ秋を過さ
女とりわきてよ侍りて
数多ひのぼりハ宿をわきあまたのこころ
返し
まさしきはわれもひとつのことはもちしと思
見ぬみとよそにしてこそ
とてそへるもの

南院式部卿のみこの女

わすらてことゝもまれ給ふ人のことゝもゝとゝと
むかしよりはさらにその人のおもひ出て
こゝひまくこゝろもしさてわひまそ
とりくまそこゝろにまかせ

よみ人しらす

八重葎して門と今まて何に悔しくあはせ給ふ
人とひとゝひくあて人よあひ給ひ
のちいてわかれしはしあれ人にとひく
甲くも消よまれくてやしはしく
あつまよれゝきこのこときさそうらい

律まくつらしれろ

源廣明朝臣

さくらの花盛なる時高砂の尾上の小松さくら花ん
見し　読人しらす
さゝ浪の志賀の花さとにさし盛なる時のまあきされたれ
あるよ人よえあひ給ひてうちしまけ

まへ事

せゝらきも渡の川のせかはらん物とおもひやせし
題しらす
世まてやゝ絶にあつてあるもあえいか物は世つくれたら

これもとゝわか菊ゝ男ハ宮ゝ弟ゝ菊なりけるか生きる尾
業平ハさハすてきとみゆるもうつのかやうけるを帰しける
人女の見えけるよみ人よ
夕されはひとりきさまかのえんやうか宮ゝあれ
女よはかりしける
源よしの朝臣
いとはるゝ身をうらむる白山ハつかなく海をふかくなきけるかな
かきりしす　よみ人しらす
人まちにわれ我身ハ難波ゝ芦のねのとけきてゆくまゝ
白雲ハ引ゝさまて山をいさよふ浦のおもかけてこそ風ハよそに見え

業平に朝臣の月すてゝやまとふみやとぬる夜よ
さらましぬさまられわれて女のいひなる
かれにつかはしける
後太政大臣
在五三諸弟月
わきもこか川をそともしるかなみの浦をよすかに行のいふ庭
久しうまかりつゝ人をそうかりけるによまれける十
月なかりよ雲をさらしつゝかへりきにける
いひ給ける
右近
身をつくしハ藻にてるをも朝霧ゝなかりにまつとらはゝ徒にして
源てわきても朝臣十月廿まとこ夜を

とおくしとつゝ行あまたて

よみ人しらす

冬されて君か随身にさかれはしへとこまよ悪けれ

女のかしらむ事わりなきものゝけしき

後りまてふかく行あまたる雪のかく除

多く行あまたて行しよ女のむくは事

津のかしけのせうみこにくみてつゝくる

三条院

兼輔朝臣

白雲はあきさいつくまつさひかあそつゝ見えけるかな

女へし

よみ人しらす

白雲はつかさひと都あれは秋たる後は雪と見えけれ

んさし行女にかくれし行きまれはわか

春なくて行あまたるよ雪はつゝよ津の

くらしもつ

わか恋はさゝのわかそこれは除白雲も空よこ遊

女へし

山さとは冬そ雪は降しきは君松はよるとてそかな

旭いひ行あまのなとしのそのくわ

はひつゝらしもつ

藤原時女

わか越年はすゞめの追に小須山とまたれ

萍卜

後撰和歌集巻第十五

雑哥一

仁和のみかとさかの御時のれいにて芹
川に行幸し給ひける日

在原行平朝臣

さかの山みゆきたえにし芹河の千世のふるみちあとはありけり

おなし日たかゝひにてかりきぬのたもとに
鶴のかたをぬひてかきつけたりける

おきなさひ人なとかめそかりころもけふはかりとそたつもなくなる

行幸の又の日なん致仕の表たてまつりける

このときのまつりことうけたまはり
まう時ともにつかうまつりしを
にてかなしう成のくしとひつかまつりて
七十余になんなりけるはしまれん

贈太政大臣

今までは千とせのかけにかくれてそよをあまりの年切なる

返し

友則

としくれのはるになりぬと花さくらちるをみすともとしへなん

外吏にひさしくまかりありきて殿上おり

多給ひける時に〇まうけの朝臣のもとに
つかはしける

平なかき

よしある事ありて雲井男は我かたなし
まて后に職給はりける時きこえける女
清真〇に給はしきこえける時御門
ゆるしに歌くさくらのいりけるに御
さいわひはなくてやまくまつるひ
もの

[illegible]

むかしより見しはさそれはひとつそな家もなくは

家に行平朝臣まうできたりけるに
月のおもしろかりけるに酒など
たうべてまかりたゝんとしけるに

河原左大臣

てる月をまさきのつなによりかけてあかず別るゝ人をつながん

返し

行平朝臣

限なき思ひのつなのなくはこそまさきのかつらよりもなやまめ

世の中をおもひうして侍ける比

業平朝臣

住侘ぬ今は限と山里につま木こるべきやともとめてん

家をうりて侍るにあはれとおもひて女のいひおくり
けれ返しに

こゝろ

蓬生の山にあひたるしかのしかはあとをたつね
まかてやしき人のうしひつれく
いにしへの海のほとりのうき藻れし浄衣人ありし家にあり
あはれさおもはいまとちゝ見ありし家の
よ浦のこゝろにくゝ待きりし人のさう
しにありけて

中務

白川の瀧のいとみまほしけれとみたりに人もよせぬもや
ゑし
しら川の花のにほひをみてまかれりそ人もおよ
ちらしまれといとまりて
見人しら
しらなみのさいをへ人こそそめしふちかよひて
あふ坂の関に庵室を作りて住み侍り
ゆきかよひ人をみて

蝉丸

是やこの行も帰るも別つゝ知もしらぬも逢坂の関

うきめかる男ありて泊そひ行ける

小野小町

あまのすむ浦こく舟のかちをなみよをうみわたる我そ悲しき

あひしりて侍りける女のあたなりといはれけれは
侍りけれはしたしき人のもとにつかはしける

あまりをくをみをしるもわしらて世のくんとか
つらしとてはましくる物をこひしくもみゆるをきみ侍
まれなし

よみ人しらす

流ありつひなきものなれはあたなる人のわすれはてたる
法皇にしめやかにおはしましける道にて

の枝おりく

素性法師

二条の后の春宮のみやすところと申しける時に
雲林院のみこのもとにまかりてあそひける
なくなりて侍りける時に雲林院のかのし侍の春
よそにくるとけ侍る

萬にくく枝わたしたまへるもみちわかはしたまへ
亭子院の御門下りゐさせ給ひてまかり
らく暁よりくしもりのまつの
らしこまりつ

右衛門

我のこゝろをくわかこゝろまちそへるそ袖のみる

志賀なとにしてこそあへくと侍れハ

忠見

恋しくハきてもみよかし浮世にいつまてかあらんとはしらねは

ひさしくもかはらぬものとおもひしに人まつよしは

これこそしのひにいひしとやいひさまハ

清原元輔

後拾遺集にいらしなをうら浪越さしとはかなしき

清少納言は清原のあたりにありける人

思ひとおもふこともしたりて女御更

衣なともひさしく院よりなりて後ハ思ひの

いつまてかみし世のありしよりまさりけん

もとの昔のことはありし世をしのはれ

ありしよはたのみつくしてよ

七条のきさき

こそのけふ絵をかきたる女房はこれや昔の清少納言なれ

清女

うかんさのさまも井の中に姿のみえて相見ぬ影なれ

志賀のうら浪そひてくしけつ人のかたみつゝ

色にみえしいかに侍ると思ひけむもれぬまつ

よしよしてこそかれぬなかそまことのかつけく

いひつかはしけるくもゐなる
くるゝよりまちつるきみはこのよし
よるさへつらくなりにける哉

くるめし

きみか為ふかきこゝろのあさはかにみえし
月のあはれをかはりあはれと

こたへ

ひとのありけるをおきつる月影をかくはやみえたる
五節のまひ姫にてもしめしとゝめらる
事やあるとおもひ侍りけるをことわり

まゐれて　　藤原滋包かむすめ

梅しくそ天津乙女と成りもの雲居の人のまゐさき
さ夜大臣のちかひなりてもまつひれふり
わかしたかへつる月中将しく侍らく
事とおりあこれはまつりわれなかりよ
こひしかるゝ人こそ人なりとおもく
まかりしわかしけれはさなひむる
侍るひとのかくことものへ人すかまつり
侍るくよ　　　為輔朝臣

人のあやめくゐやうにかつねあるとありかへ侍るにひあつ

女とよこゝろみけりとよつくしくりさうく
しとくさりとく

大江匡衡朝臣女

あめのふるひあめふるさとて源さねかたか
元長のきみこれをきゝ給ひける時てまさらは
みなもとのさくら給ひもちてまうであつかはん
ちかうとひしてゆかしく又この時よわすれ
とそ地のすゑよさしとさく出給ふまゝ
のちつゐにゆかしけれとまかりなんいれく
月日久しく給はしくわらし家にかへりて

これらことゝもにめのみきゝは遊つらしえ

中務

あきそらのあまのかはらにとふあふきかせのつかのことゝひしで
忠房朝臣津の守にて新司
まうけよ屏風にかく画の絵のかたか
あふく色よりさせしもひ江のをきてとよる
よみけむまでも

うつゝ〇

とよとくあさりともまぬさひにはゐなきあつてとよれむ
兼輔朝臣宰相中将より中納言になりて

又のとしのりゆきのくらうとかちにわかりし
ままうりてこれかれまねきひとのつかは
すとて　　兵衛佐
君なさの山にまねかれて思ひは青ふしかくれ
わかちのまつりちに人の仕せしそこの
ほりまうてこよくのこる兵衛佐
ありわさの家にて
こたへ
ひさ梓人としてはなれのこさうく成にけり
人のしらぬよ源なひさのすき給ひまうつると

女のもとにつかはしけるつけしまうして給
まれにあひてひさしくはなれたるひとに
わかてまちくちくしてはなをいさふれ
なくあまりにえくてまわりよみれとつか
けしき　　女のもとへ
中山のはるなめしもとよ近といひけるに家
三条右大臣のまかりくいくの年乃
春ねしわかしこうて秋冬の月をうつ
かくしける　　しらぬ女御
いそのかみふりにしあはてのかれれ宿に梓ていて

かの女清左の歌はまさらにこそまされわかよ
きこしと守くつかうしむ
勅定の句にて

春

春ことにいつもの花見し臣こゝろをよするものはまとひ（かとくさく）
廣明朝臣中納言まゐりて侍りける時よくの
こゝあつさを侍とて

右大臣

とひくるや君の家をあさえてこれ紫のたちをこふんとは

返し　廣明朝臣

いかにとも契りてかれ新しきをひるあるし天の衣

まさくさてのとの井筒とよりこえて　大輔
かのしにゆくくこゝろのきまえん

大輔

かつ雲なりの散行てあらうされかきゝものあらむ家の

返し　雅正

あやめてもとひもきゝの家またてわか宿根の眠る
世中のへよあかめるたしかれいゆくかれ
そのしくさ身もくゝの事わかまし
とく人の侍りゆきまへは

大江千里

まれにみえし桜の花の渡も消ゆらん身をとし
菅原のきさの花人ならのみかとにて
あはれ殿上よりありけるとしもなか
さけらんものゝめくよ

西輔朝臣

しら雲のよそにひらけてわけ来ぬるまにそ人とこそ見れ あら
法皇渡らしありしのひとのころ

七條后

人渡す事もなきよみまゝしとはしなきかなる長柄の橋と身はなりぬらん
渡女し

いせ

つくる身は渡の中にうもれや長柄の橋もつくるなり
東寺にてわたりみかとのまうりし戒ら
もんしくして仁和寺にこもりて侍り
けるに

わつきのみこ

雑のみ渡て年をつみしわれまても渡をいかゝすへき
女のわさとみちとしひきなれく

わか總の郎臣

海あさみれとわかい見ねられける白浪とやまさる
わひつゝひとりの人の家の本のこのうちの
まちこかれそして

よみ人しらず

年をへて頼むかひなしときはなる松のこすゑも色かはりゆく

男の女にまかりたるをとこくしきをうらみてかれ

あれきさつけ侍りける

[illegible]條御息所女

あそつ人の心はさらにとおもへどもあやしかりけれ

小野よしふるの朝臣にしのくにのうて（けイ）

のつかひにまかりて二年といふとし四位

にはなるべかりけるをさもあらず

かくれなりにければかゝる事にしもさ

されぬる事のやすからぬよしをうれへ

おくりて侍りける文の返りごとの

うらにかきつけて侍りける

源公忠朝臣

玉くしげふたとせあはぬ君が身をあけながらやはあらむと思ひし

返し　小野好古朝臣

あけながら年ふる事は玉くしげ身のいたづらになればなりけり

後撰和歌集巻第十六

雑哥二

思ふ所ありて前太政大臣によせて侍ける
在原業平朝臣
頼まれぬうき世中を歎つゝひかけにおふる身をいかにせむ
御くしおろし侍てあるかくおはします寺にまうて
つく侍けるにまうてゝのみちよりかへり閑院
のみこのもとに山にまかりて侍りけるを今
なんゆきすれあるとて人のはなかき侍り
られたまひくつらしまつる
としゆきの朝臣
あな恋し中にはけふは我のみやとおもひけるかな
前中務宮宣旨枇杷太政大臣の家にまかりて
ありしよくあかすかの家にてひにまて
日ころしとふ事侍ける
宣旨
おほ山のひとさきはかりけふの都を今ならぬ
色し
贈太政大臣
日ころの花を思ひけれて人山をまかりてみな
かりしまかくてかくし侍けるにおほやけ

かくこそもしらくおもひて侍けれは

あつたゝの朝臣母

ちりぬるもをしからぬ身に鶯のあひてたえにし水にみえなん

人のうへとおもひし事をわかことく侍りこそ我身なりけれ

かれしもひつるかな

閑院のみこ

わかやとはことしもかはらす草たかくなりまさりける哉

延喜御時賀茂臨時祭の日御前にてさ

かつきとりて

三条右大臣

かくてのみやむへきものかちはやふる賀茂の社の万代をみん

おなし御時この行幸にみこし

とゝめて

枇杷左大臣

君をとのいくとせ世をへてかはらぬをさきとゆくらん

戒仙かこもりける山寺にまかりて侍りけるに法

師まうしこそあまたありてまうてく

侍りけるに

よみ人しらす

いつまてとの身をかくてもかん山ふかくかたるこそ浮世なれ

見られぬをしる程をたてゝしらすして過きにし

身をそ思ひ侍ける

藤原興風

とひあは浦の梅そしきりありけるにもあらてなきに浮

まつり行きの時は志賀にまつりになりて行

とよしあひくはまいり行きさりけるに

ましりそんあるらく

よみ人しらす

あたりや着物の内の井は志賀ありけそくらそ

宇治わらにきれるの人の行きされは

あるらく

大江興俊

うち川の浪にさん道遊ありせは我も細代ならの浮

院のみくしけにあつしましし時ぐるに

あつさてうきをらんとはからく

小式部めのと

吹出るならはくもしらなれとも秋風になそなき

あらし

大輔

いくとせにみなる秋風を山にならはなきにしもあらす

おもこの末におもはくさそとひなれは

よみ人しらす

なかれて絶たん蛍のにのみにあかす人と見え

くら波のさかをよるこそなとしらくは侍りける

亭子院に宮あそびし日

菅原の浦にてまたもなかりける人のもとにつかはしける
ゆきかへりもしらぬまでやはとおもへば
つらしとおもふ心のうち
なみだこそてまくらしてあかぬのみ
侍りしかばよめる

貞文

雲井にて風のまにまに聞ゆなる琴の音に秋風のたつなる
女のもと
ぬし

大空の風のおとはこしとて桜花ちりしかばよめる
たまさかにくらもちおとこの事
うれしきかなしきをよそにて侍りける
ゆきひらの朝臣

亡れにおもひやりねたる人のよめる歌
延喜御時御しまをつかうまつりし
まうくさし御門をつかうまつりけるこそ
またちりまくあはれなる事
くらきまつ人につかふまつりし

そせい法師

長月の頃よりなくあつまちは木からくれ山は雪ふつ
やまひしてこゝろ得ぬしとなく大輔に
はかなしこまかに

藤原敦敏

おもふとて契しことは後よ人のなさけなき

返し　大輔

うけていてゆくこそほとまて契しはなきなからなき
おもひのつゆを袖にうけくこそしたれ
海の淵ならなく

よみ人しらす

ちりとみて袖よりくれて落ちるはわれなりの涙なりけり
おもひそめしは女五節ありける南殿に
さうひらく見としけるひくなり
まけよゆうのある人のそうそとし
て行きけるとよみてやる

夜をこめて涙をたてゝかきにあさきそとよみける

返し　補良朝臣

かゝらぬはあさ月のまとかはくらぬあを契よりけるよ
人のこゝろをあはせ行しあひくつゝ
かはらなく

読人しらす

限りなくおもひつゝぬるのよはいのちあれとおもへん
おもふこの色をしらぬとおもへなく
わりなくやまとかくそれ
思ひ出くるをそのみち君の白雲は成へきなり
みそかにおとこのしのひて女をたれしくへいてて
さくし帰るもいひてかりけれは
ちかくしかれとものはかなにもそなたのゆきさ
おとこのもとに女をみてかへりけるをもときて
つかはしける
かくれぬのそこのしたくさ波のよの流たえせぬ思ひやるらん

世中をいとふとひとひまのはかなきは
女のもとにつかはしける人の返しにいひてしかり
つらきとはいひしを思ひしまゝの
人はいさや白浪のたちかへりなん渚こそ思ひさ
いひし事このむしをしと時の人はいひても
聞く
　　　　　　高津内親王
なほき木にまかれる枝もあるものをけをふききすをいふかわりなさ
御門よりまかてゝ侍りける
　　　　　嵯峨后
ことしけくおほくの人のまたれつゝちりつる花を手におほへと

これハ女のよみまかりて旅にひさしく
その女のかたみに見れん風にしかれん
よみ人しらす

玉これハおきあかすほと吹風の音くるゝに見えしか
おくこの旅にひさしくとさされたりて
わしなまつらしけるを

白浪の打さはかれくるゝ身とし川あそ袖に涙
をし
どうしも涙をさはかれ浪よわが衣の袖はぬれ
まとひしらす

たらちねはかゝれ身をなしきあかくもありと
うちもちらはれくしさらまさは
ありあひくも行まゝ

わかみにまかせぬ遠くと遠き浅き心
影しらす

いかに道のありみの心はれ心の中の花をこゝろハ
人の心よりひとの方は行く
蝉丸法師

身をすてゝ人はたれ山をさゝりかね
なし
りとれおもふ

世中にしられぬ山に身なくともたにの心やいはて思はん
山の井はこかんよつらしまう
よみ人しらす
世のなかのこゝろてはやまとあくてなにさくてむすふ山の井の
やまひしもうとかゝしてとゝくまり
とゝまて
世その山のあなたにやともかな世のうき時のかくれかにせん
よみ人しらす
数ならぬ身をはなきものになしはてゝ吉野山にそ入ぬへき
返し
吉野山きえせぬ事こそかうしめこえんむかしも見れは数ならぬ
陽成院のみこにとさくとれ井よみのうち
せ給ひけるをしゐ給ひけり
ますてんしなりけり
ひさし
数ならぬ身はなくにひ白玉に光見えまほし押さへてを
海ならすたゝひとの女れくかけまほしのみく
何かそれとし月のくらさをいまこそ
家事といひつくしうきよれは
読人しらす

難波かた汀のわれむかへよ根てそこの人のこゝろを

女のはらからの見んとよせく侍りける

左勝なり

やまとの根さしてすむしに京のとの人家山のおくのはてに

しのひあそひし方よりきつくへし侍りけるを

女のおとこにつきて人の国にあらそひ

けりきてと聞つけてしかりける人なる

まてしはひつかはしける

左近の人の女桜もの山里にはいきてとはひさしく

久し

身をうしと人しれぬ世をたつねこし雲の八重たつ山にやはあらぬ

おとこなくて侍りてよしある山里

よこより侍ける女をしのひわひて

て侍りける人にたまはりつかはしけり

ひさしうこそえさらぬつとめこゝになか

やまかりとはひいまくく侍られ

左右

わすれけるよしはた事を思ひて詠さまに年のへぬる

山さとに侍りけるをしのひわひまわり

人のしりたるへくもあらしとしひ

まれて
閑院
よしや秋やりまんあけつゝけれおはまとしとるき
題しらす　貫之
世中はかくこそありけれ人こそれとあれもことひさ
よみ人しらす
武蔵野は袖のつゆけきわかれしかたゝかはるゝ
人にしられて
壬生忠岑
春日野の森の草は成るかにみえしきみはも

寛平御時宮つかへし侍りける女のもとへ衣
うちきせけりとのまゐらる人ゝそ
こゝろみんくらぶるはかなくいとものな
しらし見侍りけれ
よみ人しらす
夜ふけてよそに常にものをかけて人をこそ見
題しらす　いせ
吹風の下のちりにもあらなくにさもたちやすき名也けり
日本の今まてなかるゝまさ川のかはり
ようつまらんとの女くる流れかならぬ待

まかりのまされのわたりてつかはしけるつかり
かんのきみされもわひしくてかりもほし女
のもとにかくといひかへしたりける
かね事ありしかとわひさすれくなきを
ちりにみやこへまかるの女に行
それはかれのはよりひいきいりけり

閑院左大臣

あまの川のかはなみも打わたしてわたるは嬉しかりける
枇杷左大臣よりかくなむかれのそすゝて
ちりまかれにちかくあひてもみえ行

まつ家よりとりにつかはしたれは

俊子

とのやとをあさぢてのあきかせにさそはれはありなむ
かひし

枇杷左大臣

きみかためあきかせの音のたえぬをそもとなかり
ときとしのゝはるに後れてこそつゝきわれ
をらひきみかりにあはれはゆけくまかりける
我とゆめるつひくもそ行かる絶を
とりとめくく文かはしけるよつかし
ける女

よみ人しらず

かへりてはさやかなる業平のつくりごとなればなり
心得べし
一本に根本それ業平の家のあるじなりと云々
ありしかどもまちまちに侍れば業平の
ふかきひとつひとく業平朝臣の家に
ありしをはじめさせ侍るによりてつき
にくからぬつゆさきにとりけり
云々 ◯
今はそれより遠くなりきぬ業平朝臣の身なれ
業平朝臣母ありけるに業平は

枇杷左大臣の家にしなめとあるに
の家にさぶらひせんしをひきて
ありけるをひきてかの家にまで
ともかくもなくなりけり
業平朝臣母なめりて
しかひとも遠く都にて母なりけるを宮なりける
親王のひとりなりしをかうぶりにて
ことしもせまほしけれ
と人しもす
嫉しさもひとかたならずなれなれて花のやうなる

世中はよろこひの事もありつるそよ

貫之

情して出しこそ色見えさりけれ世をしのふ方とそ

思ふ事ゆかしきかたの人につかはしける

よみ人しらす

思ひ出る事をも世中は言の葉にいへとても人は

よみしらす

多かりしことゝもいひしもあらはあはれのたえさるまゝあはれの道

あはれなる事にはさこそ世中をそむくの出しとおもひてなん

さり後のくやしたちにもさらにかへらまし

おもしろき家のちかくて行ありと聞きて

そのいひつかはしてかれ

とかくてまかりける人によみてつかはしける

物とふともゆくてもとしへぬるはいまのとすらんくらゐをもとめ

延喜御時よみ人のまかりもなし

をもしあはれにこそつかうまつりけれ

みつね

夏のはしめもみへは現して侍りこされいはれ猶まかり 大臣

後撰和歌集巻第十七

雑哥三

いそのかみといふ寺にまうでて日のくれにければ夜明てまかりかへらんとてとゞまりて此寺に遍昭侍りと人のつげ侍ければ物いひ心見んとていひ侍ける

小野小町

岩のうへに旅ねをすればいとさむし苔の衣を我にかさなん

返し

遍昭

世をそむく苔の衣はたゞひとへかさねばうとしいざふたりねん

法皇うせ給ひてのちむくはうせと
ろくわしやうあそわしけんなりけるよ
かれにしさくまのゆくくるせぬ

読人しらず

わか年ころさうしあひけいはうの数すへ侍ける
女のもとよりわすれぐさにさしてつかはしける
いひく侍まれし

左大臣

あるじかへりあひ侍りて我身のたよりなき事

髭しけす　讃人云

京人とおまり申さと女房共のへろう市式立出て行

此ニ居の事仰くれさふに仰ける故を

出てくさうしよまり申ておれか

何すうちこのみくしとも申て

うし男人仰せ礼し

大輔

まの男あまわらの我女式出てはいかにも盛也き（?）

人のむさあまたるらうへ

男人しけす

其年も去りぬ法も津の国かくれなき者の御息女に

かくれなくうちまうしてわ

よろづよきすの道におゐてかの御まつの流にたちなやち

お坊おかしまいらせそのうち五郎乃

師ののりまつてしけるよ

大輔

うまれもなき出てあたをひさふまえ我もおくへの思ひまゐ（?）

也し　よき人しゆ次

然はきうも思うは今ひよろこ謹そよくよろ思ひまゐる

大輔のさうしにまいつての御良の御人

つらしもなとりしくらくへきなれ
たつらしかな

大輔

道志らは摘にもゆくよ足曳の山ふかけれはふみまとふらむ
なし

敦忠朝臣

志らしの雲は流ては足引の山ちを誰のかたみにかさ
いひちらしてのちまとも人よつらきかな
こゝて

よみ人しらす

いつらみあはれよあはましものゝちはゝものうき世
題しらす

いせ

なりをまとあひ見しほとのことよりはまれなる身のこの人の世に
かしこまりまかりて女なかりく
あはぬ身のつらき筆にて返事つれなきことはりにてなく
題しらす

よみ人しらす

浪間よりあはれ身なれは待なれは岸辺にも浪のよるもさし
津までも流れはてぬものゆへ袖の風も吹そへ
いとしのひくひてしのひたる女のもとに
まつりしもいとわりなきにて
あはしかりきたりつゝまてつり
たりける

春のくれかたのそらよりみかくれはまつくれはありもはかなし

むかしあひしりてはへりける宮つかへ人のまかり

人のとしころ侍らさりけるをひさしくおとつれせ

て侍りけれはつかはしける

いせ

身ひとつやくもゐの風にさそはれてあはれをたにもかへりおもはむ

ちりかたの中にいつれか事のはのかはらぬものとおもひし

はなのうへのあはれも人にしられつゝ

よみ人しらす

あひしりてはへりける人のなをさりにしてまかりにけれは女のおもひてつかはしける

女のいとくやしく侍りけることありてとしころへにけれ

はまかりのちに人のむかしおもひてとふらひにまかりけれ

男のつかはしける

我ためはさらにあはしとおもひけむ人のことはにあはれをそしる

くるしくもあひみぬことをなけきつゝ

まいりのいとまなしかはりけれは

あひみてそいはむとおもふにあはれなるこゝろをしらてさきにけるかな

題しらす

淡路島かよふちとりのなく声にいくよねさめぬすまの関守

人のよまよへとつらしとおもひけむ人よ

月をまちてよみてつかはしける

月ことにせうそこしけるに大貮藤原興範のまかりわたるに
侍りし白川といふところにすみ侍りける
大貮藤原興範の朝臣のまかりわたるついてに
みつまうしてたちよりてみつをこひ
こひ侍りけれはみつをもていてゝよみ
侍りける

ひかきの嫗

年ふれはわか黒髪も白川のみつはくむまて老にけるかな

しのひて侍りける女のもとにまかりて
うき事なれはわつらふ人よいひおこせけれは
いひ侍りけれは

貫之

あひ見てもなほあかぬ心そつきもせぬ花のいろにもあやなかりけれ

題しらす

ふりにける道にはけさは君なれは花をさかしに
女のもとよりつらしとてみつをしも
をりしてのちくやしとおもひなから
アかんとこく人のつまれて

よみ人しらず

大空にゆきかふ雲もたえ人のかよひぬ道のことはかなしき

これはよにものあらそひのなたかりけれは
かりはなれてかのあところにものをして
まられへともせてかまれんいとんかさ
事なきしひつらしありけれは
えなりては

これはある女のむかしの源なる人のおやの
ちかき人の女にかよひけるをとこも
いらぬこゝろの女のかれしくるしくなりて貫之
の家にまかりてこのかみまかりけるをとこのあまた
ありしまことにわかれしをんとてまかりおり
しをのいへにまかりて女の家をおもひかけて
かきつけゝるはそのひとくもつよいふいふ
なりける

貫之

浪のうへにまつはる吹風のたよりうれしきあまの釣舟
あまのつりするかりそめのわかれにてまつりわたるて
まかりてこゝろもとかくて行はまたきて
かしひなこしへはかなしとこそいへ

海としならしやまはあれん

読人しらす

緑なるまつ侍しも色いそはあきもかはらさりけれ

左女宮式みこのもとにまかりてつかはしけるに

のちにまたん左大臣のもとにまかりて

すゝきをかりてつかはしける

素性法師

思ひつゝの雉をまちたまへる人の侍りけるにたてまつらせよとてつかはしける

返し

左大臣

あさかれのこのまをみそとひとりわかとをみなへしとみつゝ

さゝめことのおほかりける人の雉をとりのこととも

と女ともすゝめけれはよみけれ

てつかはしける

よみ人しらす

いつとなき男とかたりまぬ道あれは雉をまつ武蔵のかすみのまよりきゝしきなくさこそゆきかはれはのちひとまつ

ひまつれもくつ

かへしてまつ

素性法師

風ふきよるもしもの木のまより月のかけさへうつるなりけり

あし　　行明のみこ

山かはにおちくる水の木のはをもあらしにこそはちらすなりけれ

大井かはのとけきみつに人しれすさけとも人の

まちつけたらん

業平朝臣

大井川うかへる舟のかゝり火にをくらの山も名のみなりけり

ねよりし后　　讀人しらす

飛鳥川我身ひとつの淵せゆゑなへて世をも恨つるかな

男業平行かよひける所志給ひけるまゝにて

業平をいとひさしくみえさりけれはまちわひて

ちゝ母ゆるさぬ人のむすめにかよひて

行きけるをきゝつけてはしりきてかくれ給ひ

と月日へていひわたりけれとあはす

てえまかり出給ひてこのかへし給ひける

とかくいひてこゝろみにいひとれ

そらしてゆふくれになりてひとり行けれは

たちあかしひとよかさねてつまかりける

人の家に住けるやまとの人

瀬はいとあさくしてありけるまゝにもくらく

津のくにしけつ
滝津せにまよふれ白玉をところかなんひろはゝ袖のひろさに

法皇よしのゝ滝御覧しける時
源昇朝臣
いつのまにふりつもるらんみよしのゝ山のかひよりくつれおつる雪

法皇御製
宮の滝むへも名におひてきこえけりおつるしらあわの玉とひゝけは

山にこもりしはへりける時
僧正遍昭
今更に我はかへらし滝見つゝよへときかすとゝふとこたへよ

まとゐしす　よみ人しらす
たのさとみなまれとこゝろあれと招く秋のまふかゝる
たゝしかしらおろしてかしこまりて侍る
時物にかきつけ侍りける
遍昭
たらちめはかゝれとてしもむは玉の我黒髪をなてすや有けん

こゝろのくもりにまよふよもすから
うけくすゝ松のかれて行末をみんとく
小車をとふつせむくつくりて侍
又同しくまかりけりてかれさまの

住よしへまかりて松を見侍て

藤原ありしけの朝臣

うへし時契やしけん住よしの松をまつひさしひさしかりけり

ありしよりいくよふるころくそなたゝへるを

これ身造ことむかしは

よみ人しらす

ちゝやなかみ我宿に見ゆるとは家のはなとをもふる山

よみ人しらす

ちゝれなきて（すかのかり）ありしの年月にこそ花のさかり

月のうれへ侍ける時はのくてしまうりて

ましかんくらしめ侍ける

業平朝臣

すみわひぬよをそらみ浦には思やことゝいふ海人

時にあはすして身をうらみてこもり侍ける時

文屋康秀

白雲のきやとる峯の小松原枝しけゝれや日の光みぬ

ゐなかもわたりぬ事とはてかりよくの

わつらひてよみてつけ侍ける

去尼

身のうきことをわひつゝ侍る人のもとへわかしつかはしける

すゝしくも人のなかめのかへさとや命たえまかりまつ
人のりこゝろ久しうちらろへひて
ほとゝしくゝるれわりつまとひく
行ゆきまれん

閑院大君　宗于女

後はたいまはひきてもその山はその梢とえんとも
月影よそれにましても
かんつけのかみよか

あけてまくらもさひしる盛ん山のさすに月もまれ

後撰和歌集巻第十八

雑哥四

題しらす

よみ人しらす

我やとゝたのひやよしてもし蛙よりはすれはなとか思はさ

人くわまくさもうくゆうもそ女のもよ

ともうちれけしうこれしろしとい

さうめくうなありなのりきこゆまう

とたうかきとこせく給うたれ

玉えこくおかうと母さうけこれせと誰とう我いさうえ

おとこのもとにめいまあまた女さまよみの

有まとん女のもとしこともなとけめくそ

てあやしくあはれなさきらすし

いひやりたれ

ころみくのとうちよ庭も非にふあはれそまされは

中将もそ門まうかひまる時よおもひゐ

きれは女く人のましまつかやうに井

とひけとやらしとこへくやりける縁よ

おしおとくきさすよ侍りけるこれ

女のもとにおひけはとこせく

わすれなん事をしいひてしのくさくりあり
ぬ事なりけり

源若朝臣

そくとそ恐こゑあつて我としもの歌する
たちまつこく人のくみたちはり
行く末は久しうまかりの月さら
まつ時は友こそまつらしけり

よみ人しらす

わさと見越後の浜なれておもひしは人の遠
ささらへあへ行く末なる人を末まの月やから

とこよまてあひまつまてこそ歌しらとは
さりなれて

そのかみまちの山の桜花まちて見しかはかなたのみさき

題しらす

いせ

いそわたる川の神わたるなかれとはまとめる月日なくなれ

小過左大臣

人めをもおもはぬ山に立雲とみれとも我身のほとりにそ
おもとの人みえあはしとくるれやあはるる
こころわかしといくりきれん

いせ

能宣朝臣のむすめにかよひける人ありけり
人のむすめのほかにてしのびてかよひける
ほどにまゝはゝの人あつまりてきゝて
久しうまうでこざりければおもひ
わびて女のもとよりいひおくりける
いひつかはしける

女のうた

今までもいのちもしらぬ身のうさを人もとめゆくなみだなりけり

返し　むこ

数ならぬ身はうきてもかなしきに思ひまぎるゝ時もなきかな
はてはまたいかにせんとてわれ思ふ
つかはしける

ある人のもとへ

わかきをとこの山の端をまちこひける人の心にて
あくまでまつとき月をまちし
まつにこそ月もいでけれ

わかれてはまたもあはじとおもへども
まちつけし

わがこころかはりしものをたのみつつ
まちわびし

人のまへにてよみける白露にこそかゝりけれと新しくかゝる
生まれとひとつ袖のかわくまもなくあはれなる御身を
とまちつゝ待ちまゐる女は年久しくその
こと待ちまゐるあはれとおもひて待ちまゐれは
読みてよみけるをとて
別れけるかのやうにかねてより契りしかとも我をこそさ
待〇とみゆれ立待ちまゐれて

いせ

ちりにけるをりさへさえん百敷の人のこゝろをまつてとりつるに
わさとまちてひさかたのしらぬありける

あらしふくのみにてあはれにおもほゆる
ひとりかなしまれて

小町かしまさく

うき事を世のなかにたえぬ思ひにて我が身こそあはれなりけれと歌
とりつゝなほまちてとうらくをしのひつ
ゆくは

読人しらず

あさましき我身の数にもあらぬかな人なれは
まつとしらず
涙のこほるゝ身をさへなく歌をまつてしらぬ
袖ありしひとりつゝも

いせ

古今
あひにあひて物思ふころの我袖にやどる月さへぬるゝかほなる

有わたりてまれまくはかれこれ物きゝうし
行ちかとこそてうらやむ女のこゝろそ
むかしく物のわかまさりけるはけかれ
こゝろみにしいつとさこそて

貫之

義もこゝにをれしはかれはいそへのかれてかせのか流れ
女をはちのこゝにいひかしまかくを久
しきとこれさらまてへ十月つりよ

わか人のおもていひし雲のたえしいふな
こゝをいひつらし秋りまれは行のさよ
うきつきゝくつきしかり

よみ人しらす

こゝろならぬ行まれうき河のいまにかの秋をうき

題しらす　續大納言

わかれおもひをとひなとひ心あきのいつ秋風ふくたちのか

いせ

在…秋中
しも(?)給うさ萬葉集そわするな秋くる風まさるかなん

まてしらす

身はかくてさはるかたなく成ぬとも心はかけにそはさらめやは

よみ人しらず

雲ちかくとひかふ鶴もあまつ空かけりてもなほ嘆きこそすれ
まつかれしとひく[illegible]ゆくへもしらぬ秋のよの月

いせ

見てもまた(又)漂ふことを[illegible]人にかくれ(?)[illegible]

亭子院(?)にさふらひける(?)に清(?)[illegible]

おもひしり(?)けるをきゝて

いにしへの海に(?)年へて(?)[illegible]

わたらひの家にて人につかはしける

[illegible]けの朝臣

足曳の山(山のイ)[illegible]の白雲立ちかへりなは

左大臣の家にてかれこれ題をさくりて

哥よみけるに家といふ字をえて

行く

ありわらのよしかけ(?)

我すみの第(?)の袖に思ひ[illegible]神の[illegible]白雲

人のもとにつかはしける

いせ

人心あらしの風の寒ければこのめも見えて枝そしほるゝ

こと人とかひ[illegible]てつかはしける

ちゑしす

うれしさ人〳〵とおもへしたまへるそれこれまさり
わか法師の涙にひとしの新匠の家す
ましらくまへ乃ちゝりとおもふしとそう
とわしつまとつらしく
うすねとこよるあわの白玉ハ君かとくのゝ露にしほ
ぬし
思ひわれさ菊の秋とて露のあるて消すそおもふまほ
きさしらす
さひやかうえさてはとゝのきハ風とひろけかう(?)

むかしとおもひ出てひとこの門侍す
侍つらしさまら
たゆ
鈴虫ともおもへぬおもひそれ新道着の秋とおもひやすく
ひとり侍ちかは人のゆくらいつれなとを
とつひとく侍まてハわさうけの花よ
つまらつらしもつ
らう人しす
夕暮風ひとさ花ハわさうけの色を新あの宿すたる
たゆらのゆせ侍もつさしの声よ

時さふけ行まつ

つらゆき

むへこそ山嵐の風とはいひけらし吹からに秋の

草木のしほるれは

小町のあね

世中をいとひてすまぬ人もなしなにかことさらにかくれ

すむらむ人の心よ

ひとりのみひとりのみゆく行まつ人の涙よ

さらひとつのめくるまつかへしまつ

いせ

山河のきよき流に百年をすまし人のこゝろにかはる

人におもはれむこそ女のかしこけれ

清らかなしけれ

ちかん人ゝしらす

世中はいかにやいかに風のさはかしき今はいかにもあらし

こゝろしらす

世中をいとふいかに風のさはかしき秋ものこらぬ

よしあしをしらす

読人しらす

ちさと

此の夜さとひとりに我もしるき消えなむと

つらきものかなしきこのよのありし

はかなし

さくらの花さくらのちるをしらすしてたゝ風まかせ

もし

風ふけハ沖つしら浪たつた山よはにや君かひとりこゆらん
つれなくもみえて
[illegible]伏見の里と[illegible]
影しらす　ひとりきこえん
我も[illegible]人[illegible]海のうら風の[illegible]

山田法師

足曳の山下とよみ[illegible]我[illegible]
神無月の一日めくれ[illegible]
[illegible]てつけていふ[illegible]

讀人しらす

いまよりも秋[illegible]
[illegible]
そて[illegible]山[illegible]
[illegible]

兼輔朝臣

思ひあまり[illegible]
あかしこと[illegible]

坂上是則

朝ほらけ有明の月とみるまてに吉野の里にふれる白雪

さ[illegible]かへりはなつまゝりまくこゝけな
おもこのはるに宿にあひし見えく
ゆきまつ女郎か[illegible]に正月つゝみやらま[illegible]
とゝまらてゆきわすれし

よみ人しらす

ある人のいはくこのうたはおほき[illegible]年のきさいの宮[illegible]

後撰和歌集巻第十九

離別 羇旅

みちのくにへまかりける人にひうちをつかはすとて
津のくにのほとりにてかきつけ侍る

貫之

あかくまうちてこく火の煙わかるゝとも人にしらすな

あひしりて侍りける人のあつまのかたへまかり
けるに桜のちれるをりにぬさを
してつかはしける

よみ人しらす

ある人のたひにまかれるに桜の枝にそへて
ところまかりける人に餞し侍り
まつところなく

橘直幹

思ひやる心はかりはさはらしをなにへたつらむ峰の白雲

しもつけにまかりける女にかゝみにそへ
てつかはしける

読人しらす

ふたら山ともにこえねとます鏡そこなるかけをたくへてそやる

こしのへまかりける人によそへてつか

とよみて　　よめる

信濃なる浅間の山ももゆなれは富士の煙のかひやなからん

と詠て京へまかりけるものともたちのもとよ大将

にをくりつかはしける

よみ人しらす

こゑひとも我よりさきにあふ國へかへしつる人のうへに我よりも

京に侍ける女子といひけるもの事にて侍ける

ころうしとてとふめとさすくいまたし

くたりまかりまかれた

むすめ

打よせて君しいまさは雲井なる清水のうらそわかとまらむ

いまくまかりなる人とといひくれけて

ありしこころひのてうしとありしとうつ

もとの國しらぬ人のもとへたえてとありけり

なとといはましといひはつるに

あはしとおもひてこれひとのゆくてをむかしとあかしつ

返し

君のてをいかに秋風ふかむものかはよそにあるよしきく

あまの家にて侍りける女のもとの

國よりわかのもとよりつひにおもはむ

藤原これたゝ

今はとて立よりし石への中にまさらむとやは思ひ
ことさらにあはまほしかる人にあひのく
つらしき物かはしらぬのそこのしらまほさ
はきてつらしきを

あはれてふ事のかゝらし

身をさらぬ事はさらには鏡影にうつりとそ衣よる
これさひのいつくさらみんわらくあは月
ゆきとひゝきれて

よみ人しらす

あけはなれ家をも所々かはる君かゆへき住みき
おひしりてけるもの女の人はなれのかみ
まかりけるにつかはしける

公忠朝臣

いまはとて遠き扱家をもあひ見ん人もなし
ねも

女

昨夜の日とまたふる人のよるのかとも恋
三月のつこもりの日まかりける人に
さけまうけさするつゐに

よみ人しらす

恵くらしてつくもましくたきれら金はに我やなかまし

若豁法師の伊勢のくにへくたりけるに
よみ侍る
いせ

別てはいつあひみんとおもふらん限ある世のいのちともなし

題しらす　よみ人しらす

そむかれぬ松の千年の程よりもふかくしつまはたのまるゝ哉

亭子院の御門おりゐ給はんとしける
秋弘徽殿の壁にかきつけ侍ける

伊勢

わかるれとあひもおしまぬ百敷を見さらん事や何か悲しき

みかと御覧して御返し

身ひとつにあらぬはかりをおしなへてゆきめくりてもなとか見さらん

見ちのくにへまかりける人によみてつかはしける

よみ人しらす

別行道は雲井に成ゆくとまる心も空にこそなれ

もとゆきの都良のむすめのくにのかみ
くたりまかるよ

いそぎさらに山よりいでて家をみたびまかりける時

返し

時さらに物おもひまさる君をおきて涙の海にのみこそありけり

あふことのいつとも見えぬわかれにはかなしかりける

君のゆくたびわかれては涙川まつはなかれてあふくや

さひしまかりける人はよそにそなへつるか

とくとて流れぬらしものを

袖ぬれて別るゝものをなくなりぬひとこそ

返し

別るゝはゆくもかへるも涙こそそでにはなかれ

まかせひとつに海ならぬまかりける人にあかすとて

まとゝく

なくなくもわかるゝの風にあはれ我思ふ人の別れは

衣別のしるしあれならばのこる人まかりもの

よ流るらしもの

藤原滋幹が女

君を思ふ心の里へひとりのみおもひの山風吹きもこそすれ

つらしとも思はぬものをいつの命まで

まかりける

小野好古朝臣

とまるべく思ふ人の別れはおしき命にかへられ

出羽よりのほりけるにこれかれ逢坂まてまかる
ともしけるよみてやりける

源まこと

紀のありつねか陸奥のすけにてまかりけるに
年のうちとをさなくしてまかりて人の
国へまかりけるにわかれをしみていひつかは
しけるたかうとのつかれける

[illegible]

ありかよひける人のわかれをしみてよめる
こゝの国へまかりけるにやさしくよめる

よみ人しらす

我をのみ思ひつるかのこしならはかへるの山はまとはさらなむ

返し

君をのみいつはとおもひこしなれはゆききの道ははるけからまし

秋ころほひまかりける人にめさもみちの枝につけてつかはしける

旅ゆく振り人の手向けのまゝにぬさやまとへ[illegible]

飛香舎の九月晦日にくらゐつかはしけるとて

[illegible]

大輔

紅葉ゝをぬさとたむけてちらしつゝ秋とゝもにやゆかんと思ふ

地へまかりける人によみける

いせ

待侘て恋しくならは尋ぬへく跡なき水の上ならてゆけ

題しらす

贈太政大臣

ちるといひてかつはらふとも花をしもまたるゝ物をそのまて

同し

いせ

さくら花ちる時にしもあはせは我も涙に袖をぬらしつ

読人しらす

春霞たちてわかるゝ風のみに外にちらぬをけふそみる

同し

いせ

めにみえぬ風によそへてつゆやしは露の命そおしまれぬめ

田舎へまかりける人によみつかはしける

君の代は待まてにはに我さへなとかへりぬとみむ

舟出くゝ地へまかりける人によみつかはしける

とまれとてくれのゝそてこそかゝる涙もよそにみえけれ

同し

読人しらす

舟出くは天の河まて来たりこそおもへの中に消なは

東へまかりける人

おろかなる涙そ袖に玉はなす我はせきあへすたきつせなれは

人し　　　　　　　　　　　　　　　いせ

よそへつゝ我身に雅あそれとしつ身にも鏡にうつりて人に
ことゝき雨にまつ花とて女のゆくへつゝ
なしきり

貫之

忘れしとまつに緒て紛れわひきれまたおもひける

羇旅哥

あひ人にやしなはれて遠江国へま
かりくだりけるにとゞまりてよめる
侍ける　　読人しらず

さか川浪もまさるやみゆる[illegible]我身とともに
たちかへりまくおもほえて
あ海[illegible]おもひ[illegible]

東へまかりけるにすぎぬるかた恋し
くおぼえけるほどに川をわたりけるに
浪のたちけるを見て

業平朝臣

いとゞしくすぎゆくかたの恋しきに浦山しくもかへる浪かな

白山へまうでけるにみちなかよりなら
の人につけてつかはしける

読人しらず

きえはつる時しなければ越路なる白山のゆきつもりぬる雪
なかりけれ[illegible]みの国へまかりく
だりけるに[illegible]女の家にやどりて
いひつきてかへりてのちにつかはしける
二三月ばかりやよひしもなき事ありて

はりまれてかへらせてそれからもみち
かさく道に侍ける

中原宗興

山里の草葉の露はしけからんみのしろ衣ぬはすともきよ
土左よりまかりのほりける舟のうちにて
見侍けるに山のはならて月の
浪の中よりいつるやうに見えけれはむかし
安倍の仲まろかもろこしにてふりさけ
見れはといへる事を思ひやりて

貫之

京にて山のはに見し月なれと海より出て海にこそ入れ
法皇宮の瀧御らんしける
御ともに

菅原右大臣

みつひきの白糸はへてをるはたは旅の衣にたちやかさねん
道すからもみち流れくるをひろひて
山にまかり侍て
日くらしの山路をくらみさよふけてこのすゑことにもみちてらせる
そのよしをきゝまゐりて山のはにいてゝ
あかく見え侍けり

いせ

草枕ひと夜ハ山の白雲を我やとらん
うらみとのとりてかへると
三月ばかりさめの時ハあふことのかたきみるめなき
うきのかりみえてこれかまたせうえし
ゆきまたかへくよ

小町

花咲て実ならぬ物ハわたつみのかさしにさせる沖津白浪
あまのすむ人のしるへにあらなくに
うらみわかしうれ実なく女の京り

まかりの月やまつよかひく

喜撰法師

わかいほの実の山路をいまこそこえくらしあかねの
法皇よとさ秋よ山ハしめつく京よ
そうりふかきまひのやりし秋なく
御ゆきにそれなる後よ寄らませ女
またふかり

僧正聖宝

今ハとてさのミ思ふらん数近くそなりはてぬ
去年ちりぬそのありゆけりよ手れ

中ころ月をみて

貫之

ちる月はなかてゆる天河あかりみちほぬみなそこにまつ

題しらす　亭子院御製

草枕もみちむしろにかへたらは心をくたく物ならましや

宿にさふらふ人つかうまつるへきよしおほせられけり

このうたはあるところにわたりて九月許

読人しらす

思ふ人きくなれはやとひつるひの秋のさかさ

草枕ゆふてはかりは何なれや露も涙もおきかへりつつ

みやのたきといふ所に法皇おはしまし

けるにおほせことありて

そせいほうし

秋山にまとふ心をみやたきの滝のしらあわにけちやはてゝん

後撰和歌集巻第二十

賀哥　哀傷

女八のみこ元良のみこの為に四十の
賀し侍りけるにきくの花をかさし
てよめる

藤原伊衡朝臣

万代の霜にも枯ぬ白菊をうしろやすくもかさしつる哉

典侍あきらけいこ文代宰相の為に賀し
侍りけるに玄朝法師のよわひの衣あひ
ともつかうまつれて

典侍あきらけいこ

雲の天の衣そは君かちよをせまわたさるゝ

太政大臣

今年より若菜にそへておもひしは嬉しき事をつまんなりけり

のりあきらのみこの賀し侍りける日
河原ひしり侍りけるに右大臣これかれ
よませ侍りけるに

つらゆき

まつ風も行ても見よかせる人の思ひもさらにかゝれ
賀人のいのりそみかさしけてしかそ

読人しらず

百とせにひとつたらぬを我にかしこきためしまなひてなそ
左大臣家の教のこと女子かしこきまなひし
ことさら修身けり

貫之

大かたや山塩風山の小松原ちゝに本末あれは女世の教え
人乃かゝりうちすへてとゝのへてあられ
花とそなりける

読人しらず

千年ふる浪のたちそめ咲かもれは女世松風も吉すめ月

女のりこころつくしきまて
天の為松風におもかけとつとふ足りら海をたる千代まて
牽牛星とこそみえて女の織越のりをしら
まことにとうりて修身をまなひてつとむへきかな

ゆいきよい法師

百とせにやもをさそへて教ある玉かとみかきも人くらへ
左大臣の家にそなはるくらしうこころつくさまを
くらしてくらくさまゝ

僧教仁教

春ことにさいて海を万世に花の盛をたくはへける

今上帝のみこゝろさし時太政大臣
の家にわたりおはしましてみてさ給ふ
御をくりもののよ法本そへてまつりて
太政大臣　貞信公
君のためいはふ心のふかけれはひしりの御代のあとならへとそ
御返し　今上御製
よしとくをなをなりけり末の道をたくる法にかひあり
今上梅壺にわたらしましし時たきまこ
らせ給へとありけれは
山人のこまたるたまはしめたるをかきあるかたるに年をつみしそまし

御返し　御製
色々の枝つけむとすゝおもひ心をとゝのへしを
東屋の法まもよくれ行人に世給ふは
こまもて
君の為いのちてふかくれ様にたちをむらまちあなたたれ
院の殿上にてことの御前にて琴弾て
させ給ひをかこらしけのにては
命婦清子　いそきまきよ
よのなかにたちをかへる君がよの人限は千代せよ
九四條のみその家の山みちに女宮の

のりよし　右大臣

あきそめし松の緑の枝ことにおつくる世を祝となるらん

十二月ものにかきりあるとしりて

律師仲之

いかて筆ありとおもはゝ色の枝ならてさへ風の音まても写さまし

哀傷哥

ありとしの身まかりにけるをきゝてこそ
来らむしまとそらく待まれん

左大臣

まことぬ人をわかきまちに我も行てとまるそかなしき
かよのつくゑく一條にまかりて

太政大臣

春風の花のちりかたとひとつを虚空に宿とも行てみんとは

返し

宮たん氣秋穂ても見ても遠くて花現みされさらかな

先帝おかしまとく世中あとひ歎
きつゝるし事傳

三條右大臣

たまくてよふつくるハ山吉氣の花風葉末と事を通物を

返し

兵部卿臣

山吉の風の葉末と寄てハ物ハ去てまめたつや
時すら氣卿臣身まかりて侍くその比
ちらく成く人のまさりいまも見
とひとゝせらまれく

時慶卿臣書

刹那ゝ猶をそへたる哀も悲しき事の限なれ

女四のみこの事ニの後よりそひてつかはしける

内侍のかみに

右大臣

多かれともふちの宿をまもるの形見にはさすらん

返し　内侍のかみ

結ひ置しかたみのこたになかりせは何にしのふの草を摘まし

女四のみこの事をとふらひ侍りて

いせ

あふさかの関の中より出きさへ人の涙もつきやせさらん

返し　読人しらず

関人宮義をそかの剃りはしてゆるそへつらせさります

先帝おはしまさて又の年の

正月一日に遣り侍ける

三條右大臣

待よにをや春もえんわかとしき春花をめぬもしのかぬま

返し　兼輔朝臣

なく涙雨とふらなん年はなりてかはりにしきなもをしつ

昨日をもつかしつるしもの

三條右大臣

人のもとにしのひてまかりけるに我男は宿にとまれりけるに

女の男まかりて侍ける人侍まつとこそあれ

昨日よりのちのときさへつきて待つかな

手折りて見ん待つらく

兼輔朝臣

秋の野の草の着物の人見えてとに現にかけて来しかりけり

わかひとりしく待ちける女の男まかりけるに

もとよりひ待ちけるわかひさにきくの花けく

としの嶋待ちまかりて

閑院左大臣

夕されに雑の花をとりて書きてひとよりかの花萩の露にき

七月ばかりに左大臣のもとにまかりけり

まかり時によひによひて待ちまかりわかひてきさい

の家より萩の花をりてつかはしける

まかれて

太政大臣

女郎花枯れにし野辺にすむ人はまつ咲く花をまたでとぞ見る（まてとこそ見れ）

かくありけるほどに人の家にまかりて

かくてのわしの家にて来しける人

に流つかはしける

いせ

今はへの新たてふかへて秋の夜かくて夜露を渡してなし
侍りて行きつ舟寺にかく侍りけれ
らしくまゐりしく
独りこそそらまれ夜の月のもみちのをしむ夜
法皇の停てくなりたる時にひとなれ
さりしよそそ人にとらり侍り
京極前大臣
書陳なとをこもり侍る時にあひみて擣衣出侍る
女房のかへしのこれ侍りける時
右大臣

此うち千代と契りし君とわかれて山路にこそあかさる
先坊に世をしくの君大輔につかはしける
こゝろ吹く新良のしらあ
あら玉の年こえてけりあかたる鶯の声すれぬらん
ゑし
大輔
菖蒲くそ峰の月のまさしかりの君とちかりて
あきしとしの秋
雲上新良女
読人よみ遠秋の霧のあらかれ柳ともひけるを
これよりひとつの名残れかりしとこそかりて

侍りけるにつかはしける

藤原守文

華咲し事とこゝろはまとはて白雲の流すなりける

返し

清正

こゝろふかき宮の中なる人の親の心をやみと道にまよひぬ

兼輔朝臣なくなりて後土佐の国より
まかりのほりてかのあはたの家にて

貫之

うゑをきし二葉の松はありなから君のちとせのなきそかなしき

なれつゝもかくはかなしくなる人

老まさて年のくれにと成ぬれはまた流るゝかな
人のおやてひとまくくこゝろまよふ
くるくるくとありしをひとたひかれは
えんのはなちりけれはつけ侍る

戒仙法師

色あまたの人を秋まてすくしつゝ神はなき世のなかれ
かくありつゝ侍りける人のいまはこゝろにて
侍りけるあはれの日人にそひてゆく侍
まかりて

読人しらす

親かくれ侍りける時我身よりやまひをも思ひやりける

人のみんそくかれ家有しくら

まさ日

延喜にあることもとて筆達の家と達

親忠親良寿まかりし又のとし正月

新院れとのまの家にしくこれなれ

まかりしく後かりしたくりまつ

清めてに讀侍りし

清正

天の原通ふ方やいつまでそ白雲のかかるあたりは遠き

あやのまさしまてしへ来まくこそ

きのふこそけふ諸ともにいまたまては

桜とく人のいひければ

よみ人しらす

他人の袂にあれの梅の花をへ萩花にそてなハ見ては

なし

よそにきく袖のひちし苔袂にあるもみしそれまわし

よみしらす

いせ

額のあくれをたれかなれとまつハもとめけるそ

人をみくまくかくろうかくしくもひく

あかひかりて新たちてそれ夢に見えん

まれにもあひみる人はかくなんといひ
つかはしたりけれは
玄上朝臣女
ときのまもなくさめかたきあはれもまことにすゑもあらは我をしのふや
返し
大輔
恋しさをなくさめかねつゝわひしらに我もなけくと思ひけるかな
ありしよりけにしけりのみまさるらん
とききて
いせ
かくそらは我身の上と思ふらんとたのむとてもとはゝ
むしはかひなきものゝひとりの
なくなりけるにまとはれしこと
くすりさそひたれは面影にたちまさり給
たれけれ
まくらさへうき涙のそての雲井にはまたなかれ
はまなれ身まかりくのとしまれしえ
まその流ありつの日かきりしひゆき
ことなれ
藤原敏行
かれ人のもとにはつかはしける年をへてわかれしまゝに

題しらず　　　貫之

さくらちる木のした風はさむからて
そらにしられぬゆきそふりける

132X
104
16